中村俊定文庫
文庫 18
241

竹馬集　序

後漢の紀に。并州の童児。
東へ行る騎てへ。郭伋を
迎へし事。門のむかしの古事
の忠見あり。いにしへを今に思ふ時。
内裏へ光さしそへぬる。
このあたり竹馬とまいらするわ。
ふし[illegible]

とや花鳥はさもあらし
けるに。其まゝ忘れける
ふるさとにいとり首あるに。
うれしきいろひありし。是を
いはゞたゞしくこゝも我おぼれ
剔除をさらくえらるゝふ。
鉄欄や。ちゝくそのはしー
みそらにちるまで御座候

空花のこれ。銀鞍を騎り
珊瑚の鞭をとり伸く。隙
えの白しこのわたりなき雲
ゐのさそふ嬌艶擲木擲の
珍無。なほしく物好擲り
女ゝにせるよりもあらは。
只行るの一句をとゞめし
つゝし

元文三年つちのえ
むま正月吉の字

祇徳

舟つるゝ
のりまとゝる
春やきのふのふ

仝前

花兄のこゝろや桜も赤いけし　麦阿

雪折も限ありせぬ柳かな　摂川

きりしま春に隣の窓明り　大梅

山水の隣みな眼し大平に　竹氏

としの市男女の差別なかりけり　花笠

ゆの花も軽し所さ残る衣　餅平

仝前

[illegible]

春雨や拍子ありける琴の音 雪堂

初しほ枝の友あり諫鼓鳥 士朗

門の花は開けて遊べと門すれ

遊行うり年れ汀の鷺泥亀 黒露

仝

うら白と麹に飛や雀の巣 百菴

春暮や鳥の上野の歩きさ 治風

雅陽くん年の花しわもし毎 白主

[illegible]

神鏡一盞の酒定め腹うしき 貞梢

おのしやまれ掃除さの水て筆忘 東示

陽おりど人筆をこるあさ桜の吹 千雪

暦日終

蓬ついて桜ハ咲ぬ師走のす 千山

りふ下て文登るや、むの筆 竹口

温飩粥ふくもあるの手所之 花孫

世のうあと波子ハいの道 史

守歳

来春の柏子ちろくとしくれぬ　亜峰

おしみつまる人の呼ぶとおゝあり　梁紅

谷くへ手の割きり榾の数　德別

うちんけとのくとひさくゆ炬燵の所　祇児

あのく松梅弁賛の春のく　水石

煤とさまき勝とつきさて結ぬ　水徳

大としやこのとしわ手ぬ酒とせ人　祇川

誹諧之連歌　祇徳拜

万人としに寄ゝ若水に胡の蒸　

城下へさも門く新松　汶光

馬柄杉下とつちる孔の安あり　半秋

旦那の拝織うてい方うけ　流光

様の月夜入くそつと精さく　竹堂

家祭手ゝ今ゝ東ゝ地の秋　祇来

[illegible]

足駄はいて出る女もありすさまじき道

ちる花や寺へ参るや　祇文

二三年とられた人に金の花　祇堂

仲條が甥めを守るしぐれ　水守

主命にかくありつゝこの花見　泥牛

鎧の袖をあつかふるさのつき　水如

うつくしい哉て閑構のはつの花　林泉

旅の宿ウトもある女郎花の月　巌究

[illegible]

徒忘翁之傳

あるひとりの翁あり。氏ハ長井名ハ徒忘。虚に住るゆゑ人也。あしたに杖を頭をやめ。夕には麦を流るゝの頭を忘れし麦儀けすれの徒にはあらで。そのつらくやすはるゝの癖とありて。よそはず清て其の長は嫌にはかなれ。

諦めかね

とし月をふるまでも。つきせぬものなきにや。
人のゆるさぬよりぞあらん。長過助り。吾を能
知ル人無すてもゆるせども。吾ハ能志ら
さる人ハ是を怒る。怒る人ハ君助けて
赦さる人ハ吾痛ひそ荷擔する人なるん。
又つのち義の難を侵しおるよ先の波
よるまものもあらん。道の業の気にて
まもあらて吾よりうへ越を忘ましあら

己春風吹

己春風吹
己春風吹
己春風吹

あ凋く。ひと日。犢鼻褌を落しける一
興あり。或ハ形弱て筆管の軸を齧。また是
楊枝を鬚に忘る。起る事ばる忘れしハ
筆に懸ぐ飲まる事故忘れてハ華を
うなし。盃ハ鳥机に倚て寐なり。
或ハ談柄なくつて困しむ扇子蓬首
散葉いよいよますなし。かみのい所
是放心のいまだなきや。中々まもならぬ

おほしハ清くも山このとのとよけり。好
光ら道路とも思ひ東寄路つくるそも。
さやうた志りやまれ志りきそてら達成り
得るハ道路賀加紙ワきまてら。罷おそれ
ときれまじまぬて。みのへ叢事そとあはれ
へ屋ゝ佐渡の国事我載後てまくのあひ
まるワの係。紀もうもいきあらまむ。此くき
くり合わみきうて。家の業忘まぬ

梅之章

白梅や来てもゆかしき香ばかり　古路

ちつまりと梅の手燭や下十日　十兵

梅まや懐あまね女子[illegible]　白猿改 爽邦

柳之章

寛引をひけよ柳のいと柳　五井峠 桂州

日のみけのころ葉ふる雛鶴　笹山

正月二月三月。四月まつのよみし　伝貞

耕浪

能ゝもも住むむすめまし柳かな　万里

はつくや蘆の丹寒け緑　芭山

けんくゝと水きゝすゝねを入て　祇徳

仝

きの妻は人のかをやるまでかな　蟻力

京さかりも柳のちきへまみとり　水琴

風の成ことまつの色くかう柳哉　芭山

其園

一らぬ

あさみしりけさことゝ中ゆる　女年

やさゝ久の柏子まて園のつゝめけり　祇貞

仝

さ納しり諫あきし世つの師走かな　梯雨

寒き鳥ほとゝしら雪や梅の花　風徳

月華ゝ對して見よや俳ゝと謀　祇丽

やまてるのかほるを花乱てそさゝぬ　華煙

仝

[illegible]

とし渡り道にふみやまよふらん
霞八幡の宮也としのくれ　敬之

業せんと賣めて帰るや牡市　水如

仝　足事をしらぬ者は人欲也

逢ふらす十二月も同しこと也　流光

松原に雪ふり積る師走かな　竹堂

師のなりすまして
松竹よ笑も門をとゝもあのくら　祇来

春おもふ何をとしもた斎浮世て　巫峡

陽春

暮より八旭大しと新の春　金翠　空翠平悍

川竹や安る俵との舟寶舟　天籟　仝

あさましき柱立ふや家の春　汶水　汶光弟

元旦

老来新年をおのかし子の日　台丈

よきも若干さまて明の春　昌平村上　昌斗

芳春

沙らとさに門もとさぬ舞日かな　嵐花

きのふみし旭はけふも玉椿　桂花

富春一ふきとくさけや今朝の梅　素秋

風よりも折ル人はなし梅の花　芸鳥

金衣公子

鶯や先啼そめてころころ　木人

鶯やいやしからさる影法し　乙雨

[illegible]

梅さくや墨をおもの月夜哉　林[illegible]

宗川の夜へ濁らぬ師走哉　祇文

松杉も新らし春や門の外　祇堂

清明しも寒ちぬる師走　八年

富貴のつる除夜の豆　半秋

季吟の師走月夜もさもありて

見るにもありけり師走月夜の色　文完

守武の国としるくの師一ぶ　弁陸

追加

そのくくし [illegible]

祝号 [illegible]

[illegible] 章

歳旦

ゆく親二度のしこゆる [illegible]　祇子伯

家の名れやまとこと葉やわか身の春　祇子仲

鞠をけて蹴 [illegible] 玉 [illegible] 春　沖井序 [illegible]

追加

歳暮

待つくと人まからなて老の暮　雉沖　芳室老人

平成元年九月 修補